

津田昇平教話 第四四話

令和三年二月十三日

生神金光大神月例祭感話

神の祭事は一人で仕えるのぞ

令和三年二月十三日、二月の生神金光大神様の月例祭を、共々にお仕えさせて頂くことができました。

祭典後は、芝田素子先生から、あのようなお話を頂きました。御夢の話も出てきましたし、また、典樂のことにまつわるお話でしたね。じゃ

あ、今日は典樂があったかというところ、今日は、典樂はないんですよ。

朝の教話にね、私、今日何分しゃべったか知らんねんけど、今日は大事な話さしてもらった。でも録音をし忘れてね。まあ、それはそれでええかと思うて。かと言ってこう、あれもね、私なりに命込めて話してますんで、もう一回同じ話は、まあできませんわ。だからもう、死ぬまであの話できひんなあと思いながら過しているんです。

まあ、それはそうなんですけれども、お祭りというのを、祭員さいいんも典樂てんがくもない状態でお仕えさして頂きましたね。まあ本当に私は気持ち良くてね、楽ちんでね、ありがたいんですよ。

私ね、教師になってしばらくして、その頃にはまだ、結婚はしてませんでした。もう朝から晩まで、ずーっとお結界けっかいやらお取次とりじやらしてましたよ。で、くたくたになって上がって、もう膝ひざも反対に曲がるんちゃうだろうかと思うぐらいにね。痛かったり、ちよっと折れてる時もありましたね。まあそれでも神様は「膝も足も崩くずすな」言われて、「折れたらそれまでのことや」「座まとけ」「って言われたんで、ずーっと正

座で座ってました。

ある時、上に上がって、もうボタンと倒れて、意識失ったんです。

じゃあ、ふとした時にね、神様に「起きろ」って言われました。で、起きた。起きろ言いましても、体動かんのんですけど、あんまりね。

「今から連れてってやるから。今から、おしごと祭事を教えてやる」って言われましてね。それで、「はあ」って。「今すぐついで装束を持って、車に乗せて、

そして神の言う通りに行け」言われましてね。

今何時かなあと思ひまして、もう十二時か、それぐらいやったかなあ。

言われた時は、十一時半くらいやったんかなあ。ちょっと覚えてないなあ。あ、あ、でもお祭りが始まったんが、二時とかそんなやつたもんな

あ。二時間位、とにかく運転してました。わけが分からずに、とにかく言われるまんまにねえ。その時着物でしたよ、黒衣くろいでね。で、お装束を用意して、そしたら、「あれを持って行け」「これを持って行け」って。「ゴザみたいなん持って行け」って。お祭りを仕えるって仰ったから、祭詞かみことは「って言ったら、「空くうで読め」って言われ。それでとにかく、あ、そう、「玉串たまぐしは」って言ったら、「玉串はいらん」って。「向むかいで用意してやる」「はあ、そうですか」「でね、車くるまとにかく乗りましたよ。ほんでエンジンかけて出たんです。

あれ何月やったんかな。ちょっとはっきり覚えてないなあ、もう。せ

やけど、もう秋でしたよ。秋も深くなってきましたね。寒かったん記憶してます。で、暗い中にね、「あっち行け」「こっち行け」って。まだこの辺やったらこう、明かりがありませんでしょう。まあとにかくね、どこ行ってるか、今みたいにカーナビもありませんよ。これ、どこに行ってんねんやら、ちょっといいよ、よう分からんのです。「あっち行け」「こっち行け」「右行け」「左行け」「ここ左折して」「ここ上って」「ここ通れ」って、ずーっと二時間以上行きました。

気が付いたらもうね、真っ暗ですよ。どっか山ん中です。で、それどこの山ん中もよう分かってません。西の方に行った記憶はありますよ。そこから山の方に。で、大体のところはねえ、私、大学が神戸こうべやったん

でね。神戸の山とか六甲山とかやったら、まあ分かるじゃないですか。明かりがちよこちよこ位はあったりとか、夜とかでもね。夜景とかちょっと見よう思っても、まあ、全くないってことはないかなぐらいに思っていました。せやけどそこはね、連れてってもらったところはね、ほんまに何もないんですよ。もう、電気もなんにもないところで、こんなところあるんやなあと思って。尼崎から二時間位で。ここがどこかも分からんけれども、とにかくまあ、かなり山の上の方に来た記憶があります。もうぐるぐるぐるぐる回ってね。

ほんで、もういよいよ、看板もあるやないやら分らん。この先行き止まりになる思って、落ちるんちゃうやろかとかね、そんなこと思いなが

ら行きまして。で、「その辺り、ここで右に行って、入って。で、車止めて」。車止めました。で、荷物降ろして。「あっちの方に歩いて行け」って言われて、ほんじゃあ、まあとにかくね、お装束じやうそくの鞆たもとやらありますたでしょう。あつ、そやな、「ここからあっちに何分か歩いたら、こんな場所があるから、そこでお祭りを仕えるか。仕えてやる」「祭りを教えてやるから。祭事まつりごとを教えてやるから」って。で、「着替えい」って言われたんです。ほんでまあ、そうです、そうです。そこでね、車とところで着替えた。

せやけどね、怖いんですよ。まあ言ったら、私もね、別に二十代半ばでね、普通にそんな、オバケ怖いとか、そんなこと特にはないですよ。

せやけどね、まあー真っ暗でしたね。真っ暗やしね、もういかにも何か出て来そうな感じ。人の手が入ってるような場所じゃなかったんですよ。で、とにかく着替えました。風も、そんな時はね、あんま風は感じなかったんですよ。せやけど、ちょっと、さすがに山の上に来たから、まあ、十一月ぐらいやったんかな。ちょっと寒いなと思いましたよ。で、着替えて。下駄げたでしたけれども、まあ、下駄は脱いで運転はしましたけど。で、お装束に着替えて。ゴザこざだけ持って。笏しやく持って。「拝詞集はいしじふは」言うたら、「拝詞集は置いといたらええ」って仰る。で、私、笏しやく持ってね、まあとにかく暗いんですよ。ほんまに真っ暗でねえ。今みたいにこうスマートフォンとかでもないんですよ。携帯電話はありましたけどね、とに

かく「置いて行け」ですよ。で、「車の鍵かぎも閉めず」そのまま行け「って。もうどこに行ってるやよう分からん。ほんでね、暗いんですよ。あの、真っ暗なところって経験されたこと、山の中ってね、ほんまに暗くてね。分らんのですよ。この先、落ちてもしかあないうところですよ。

暗いなあと思いながら、でも、とにかく言われた通りに、だんだん目がすこし慣れてきて、ちょっと歩けるかなあとと思って、歩いて行きました。言われた通りのところ、何分か歩いて行きましたらね、そしたら本当にどれぐらいかなあ。このお広ひろ前まえぐらいかなあ。ちょっとね、空いたところがあった。でも、その空いたその上はもう木がね、ブワァーって、もうたっかい木ですよ。何の木かもう分からんけれども。で、木の奥

っていったら木がいっぱいあるんで、その奥なんて行ったら、もう真っ暗で見えないんですよ。ほんでね、遠くでね、ワオオオンとか言うてるんですよ。もう、なんか食われるんちゃうかと思うてね。何が出て来るやよう分からんなあ…と思うぐらい。分からん、なんかこう虫の音も聞こえてくるし、鳴き声も聞こえるし、けもの獣の声もするし、そんなこと感じながらね。

じゃあ、「じいじで」ゴザをひけ」って、「今から祭りを仕える」って言われましてね。で、「ゴザをひいて、てんちかねのかみ「天地金乃神 申すことはあるか」と言われて。「もう、ただただ神様に、もうなかった命繋いで頂いたんありが

とごうごいしますと申し上げるばかりでございします。あとは人を…神様の御用のお手伝いをさしてもらいたいですけど、徳がないもんですから、徳を授けて頂けるように、そのようなおかげは蒙ごうらして頂きたいとは思っています「そしたら神様、「それでよい」と仰った。

でね、「ゴザを敷きますでしよう。もう、とにかく葉っぱだらけでしたよ。まあ、考えたら秋ですもんね。で、そこにやりましてね。座って、もう真っ暗ですよ。なんにも見えないです。そんなとこに、お装束着はなむけた人がね、座っとるんです、正座して。異様でしょ。

そして「神が見ておるから」「って。」お前の前におる「って言われましてね。前。もうね、どう見ても天地そのものになってきますよ。」前にお

る「って言われたらもう、周りのね、木がね、ブオオアア…ってこう動くんです。すーごい風が吹きましてね。びーっくりしましたよ。ありがたくなって思うよりか、怖いな思いましたよ。おっかないなあって。「おそ恐れ多い」の、その「おそ恐れ」ですよ。で、そこから「お祭りを仕える」って言うって。

で、ハヤヒ笏を持って、かしわて柏手打って。あっ、そうそう、それまでね、私、柏手ね、許してもらえてなかったんですよ。柏手って四回でしょう。「軽々しく打つな」言われましてね。それから私ね、しばらく柏手打たしてもらえませんでした。一年間、柏手打てませんでした。ほんで一年くらい経ってね、「一っだけ音出すのを許す」と言うって。また、それから半年か

一年経った時、「二回までや」って。「四回叩たたいていい」と言われるまで、何年かかかりましたよ。でね、まだ三回目ぐらいやったんです、その時。そこで、お祭りをお仕えする時に、「柏手四つ叩いてもいい。許してやる」言われて、それでも、四年か五年かかって、初めて柏手を叩かしてもらえるようになってね。

で、すごいですよ。そこでね、もう真っ暗ですけどね。でも、空はちよっとなんかこう、月があったんかなあ。あ、月が上がって来たんかなあ。もう、木で隠れているような感じではあったんですよ。せやけどもまあ、私、暗かったですけど、でも途中からね、月の記憶もありますんで、どっか見えてきたんやと思います。満月とかそんなんじゃないかな

たですよ。

まあ、とにかく柏手打ちますよ。そしたらね、一回打つ度にね、ブワアアア…でしょ。ほんで四回叩いたらブワアアア…って行って、ほんでまた、頭の上からね、葉っぱも散るしね、すごいんですよ、とにかく。

反応が、天地の。

で、そこで神様、ああ、御座おわしますなあ…っていうのがもう分かったんで、そこで私としても、祭詞さいしを、と言っても祭詞やったらパラパラパラと読めてね、それがありませんから。もうその場で「掛けか巻まくも畏かしこま生いき神がみ金光こんこう大神だいじん 天地金乃神の大御前おおみまえに…」って申し上げとった。そしたらね、すごいんですよ、これまたね。ブワアアア…って行って、地響

まするような感じでしたよ。

「それから先はもう言つな」と言われたから、まあ皆さんには言いませんけど。私の中でね、お言葉にして、お話を申し上げとったんですよ。そして、玉串たまぐしがないなあと思っております。そしたら、あ、そやそや、ちよつと話、前後しますけどね。その暗い怖い中ですよ、「もうちよつと行け」って言われて、行きました。そしたら「枝があるから、一本取れ」って言われましてね。で、何の木かも分からんようなの、ポキンって折りましたよ。

ほんでそれ持って座って。で、そこで玉串を、お祭りする用の。で、飛ぶんです、風で。だから「膝ひざのところところでちよつと押さえとけ」って言

われて、押さえて。ほんで祭詞奏上まつことばひょうじょうが終わって、で、玉串の時です。こ
うやって神様に申し上げさせてもらって、ほんで、お供え言うたかてね、
案もないでしょう。で、「と」にお供えしていいか分からん」って言った
ら、そしたらもう、「その辺りに置けばいい」って。「その辺や」って仰
るからその辺言われて、まあこう、拝まして頂いて、こうしようとした
ら、また風がウワアアア…って来ますよ。今度後ろから来て、じゃあ手
にあった、これぐらいの玉串ですよ、もう風でウワアアア飛んでいって
ね、向こうの方に行くんですよ。で、「受け取ってやった」って。で、「あ
あ…そうですか」と。

そしてね、「これが神の祭りである。祭事まつことばである」と。「今は誰も参っ

ておらんが、いづれ氏子うぢこが参るようになるやろう。この広前ひろまえに参らしてやる。お前が仕えるのは尼崎のあの広前のようでも、その広前は、この天地そのものの広前やから、そこで仕えるということをお忘れるな」「一人で仕えるのぞ」で仕えるのぞ」って。「どんだけ人が参って来ても、一人で仕えるのぞ」って。そうやって教えて頂きましたね。

それから、まあそれこそ、最近の事まで考えたら、楽人がくじんが増えたりとかね、祭員さいごんが増えたりとか、御用奉仕が増えたり、参拝者が増えたりって、ありましたね。まあ、お祭りも二日間に分けてお仕えしたり、ありましたよ。

でも、お祭事まつりごとっていろいろについては、あの、神様に教えて頂いたのが祭事で、そこに、参らしてやる。あるいは仕えさせてやる。奉仕させてやる。それは神様が氏子のためにさせてやろうと思ったたら、許してやるっていうことだね。それで、典楽てんがくのお供えにしても、参列のことにしても、広前係ひろまへにしても、参拜にしても、御用奉仕にしても、みな、神様がその氏子うぢこのためにさせてやる。「神が願うことはなし」「お前も願うな」って言われた。「はい、私から願うことはいたしません」「祭事はお前が一人おればそれでよい」と仰る。「形も、本当はいらん」って仰いましてね。

で、御扉ごひらつけさして頂きましたよ。これもその頃からおかげ頂きたい

と思ひましたよ。でも、「それも形に過ぎん。なくて構わん。神はここに
おる」って、このどいにか分からんような暗い森の中ですよ。「お前がこ
ういふことを言えば、そいに行つてやる」って言われました。それが
まあ、尼崎のこのお広前で、この御扉になつてくるわけですけど。

で、「んじ」参らたらどういふ者は、参らしてやる。奉仕をして頂きたい
という者は、わつてやる。仕えたいという者は、仕えさせてやる。
わつてやるけれども、祭事はお前一人でするんである「って、や
っぱり仰いました。だから、「あーそやなあ…」と、それからもうっつ、
その心でやらして頂いてますね。

でね、こないだ祭員さいいんなしで、典樂てんがくはさしてもらってましたよねえ。まあ本当はなくてもよかったんですけど、でもまあ、いきなりやったら、
樂人がくじんさんもびっくりするんかなという気もあったんでしようかなあ。神様の御心みこころもあったんかもしれん。私もその辺、気は使ってましたけど、でも今回、もう何もなしにして。

私ね、まあ樂らくでねえ。樂なんですよ。もう靈祭れいさいも大祭たいさいも私ね、祭員さいいんも樂人もなしです。一人でさしてもらいますよ。で、これ、「あー、私わたしこ褒美ほうびやなあ」と思うくらい。普段はね、樂人がくじんやったら樂人を背負わんといかんし、参拝者さんぱいしややったら参拝者を背負わんといかんし、祭員さいいんやったら祭員さいいん背負って、その家族のことも背負って、命背負って、神様にお仕えさし

てもらってる。それはそれでいいんですけど。氏子うぢこのためですから、彼らのためにしてますから。本当は一人でいいんです、私。でもなかなか、そうもいきませんでしたからね。

でも今日は、また久しぶりと言いますかねえ。やっぱりお祭りをお仕えしながら、あの時と一緒になあ、あの時は、またこのお広前ひろまへで、御扉みかどつけて頂いたこのお広前で、さして頂くんやなあ。ありがたいなあ。一人でお仕えさせて頂けるってありがたいなあ。いや、本当はこれまでもずっとそうやったんやなって。

あ あ 有り難がたいなあ……って思いながら、喜ばしてもらいながら、今日も拝詞はいしあげながら、あの時のことを思い出してましてねえ。あれ思い出したら、

怖くなってきたりね、緊張したりしてね。一人で仕えるというあの光景をやっぱり思い出してね。ああ、あれがお祭りやったんやな、神様に教えて頂いたお祭りやったと思って。

今朝、朝の教話で、こういいう話したんですよ。ここまで詳しくはなかったか。その時でも、私一人でお仕えさせて頂くって本当にね、ありがたく、もっと言えば、調饌ていしんだって私一人でもできますもん。だからね、誰がいなくなったって本当にいいんです、私、一人でぜんぶできるんです。機嫌よくさしてもらえますし、ま、その方がね、楽は楽ですよ。

ただ、この広前ひろまへでおかげを頂いた者が、神様にお礼を申さして頂きた

い、何かしらさせて頂きたいって願う氏子には、神様がお許し下さった
らさしてやるうとするし、またそれがないと立ち行かん氏子というのが
ありますから。特別に、格別に、さしてやるうという時がある。

でも、氏子の方は、また勘違いかんちがしたり、何かしてるような気になっ
り、さしてやってる、してもらってるのにな、お許し頂いて、させて頂
いてんのに、してるような気になったり、思い違いしたり、勘違いした
りってことがあり得ますんで、もうそういうのは穢けがれますしね。そういう
のが全くないとはね、人間はね、油断できんのんです。油断できんから、
神様だって気を付けますよね。私もそこは気を付けます。

御大祭ごたいさいも、本当に一人でお仕えさしてもらっても、私は全然ありがた

いんです。今日も本当にありがたかったです。これからも多分そうやと思います。元々、私と神様との間柄の中で、お祭りというのは仕える。それを、さしてやろうと。みな、氏子のために神様が。参らしてやろう、奉仕さしてやろう。誰のためか。その人のため、その人たちのためですよね。それ以外ないですもんね。楽がく、なくっていいんです。祭員さいいん、いなくていいんです。お広前だって本当は、お祭り仕えるだけやったら、なぐって全然構いません。それ、本当に教えて頂きました。

ただ、氏子のためを思うたら、やっぱり機会を作ってあげんといかんなあ。私にとって楽らくやからからかららとと言いって、それがいいというわけでもない。別に楽したくて、御道おみちの教師になってるわけじゃない。いや、私、御道

の教師のためやから、やってるんじゃないんです。教師であるとか、職業でやっているわけでもない。ただ、神様に助けて頂いた一人の人間として、神様にご恩返しをしたいと思いますと思って、やってるだけです。そのため、この命を全部捧^{たく}げてるだけでね、人が助かるために。そのために使^{つか}うて頂^{たま}げんのやったら何でもいいですよ、別にね。もう元々無かった命ですからね。今更とやかく、何とかしようなんて氣いさらっさありません。お金もいりませんしね。

ただ、氏子が助かるために、神様が助けようとして下さるそのために、参るとい^{まゐ}うこと。祭事^{まつりごと}に参^{まゐ}らせるとい^{まゐ}うこと。典^{てん}樂^{がく}も許してあげるとい^{まゐ}うこと。参^{まゐ}りも許してあげるとい^{まゐ}うこと。それが、この広前でおかげ頂

いた人間として、神様との間柄において、それをさして頂かんということ
とが、それ自体が、天地に対してご無礼になる。礼が無いということに
なる。そういうご無礼にならないように、機会を与えてやろうとして、さ
してあげている。さして下さっている。

これ、当たり前のことなんですよね。この当たり前のことを本当にわ
きまえて、人間として、本当に、ご無礼、お粗末、不行き届きが多々あ
り、そんなことばかりしてしまう氏子であり、神様に恵んで頂かんか
ったら、呼吸すらできない。お天道様、アツクお照らしくくださるのも、雨が降
るのもみな、神様のおかげであって、息の差し引き、血の巡り、手足の
動き、みな神様のお働きであって、そのお恵みを頂いて、生かされて、

生かして頂いて、生きているに過ぎません。それでありながらも、ご無礼、お粗末、不行き届きが多々ある。

でも、信心して真まことを供える機会を与えてあげよう、この恵んで下さるこの機会を、お祭りに参らして下さる機会、典楽でも参列でもさして下さる機会、機会を恵んで下さるといことが、ありがたいことですよ。それ自体が神様のお恵みなんですね。これ、当たり前のことなんです。

「ええー、そんなふうに」「って思うんであれば、そりゃ、みなさん頭すが高いだけです。神様より上に行ってるんです。「いや、そんなつもりありません」皆言いますけど、でもそうなんですよ。自分の正体がよう見えでないだけだね。本当に、天地金乃神様てんちかねのかみは拝ませて頂こうと思ったら、

本当にただただ神様のおかげで、今、自分が生かされて、生かして頂いて、まあ罪深いなんて、あんまり御道おみちでは言いませんけどね、せやけどご無礼が多々ある人間で言ったら、そういう意味においては、罪深いでしょうなあ。

でも、そういう人間でも、神様は、かわいい、かわいいと思うて下さって、かわいいから愛情注いで下さり、必要な物を恵んで下さり、金光大神様こんこうだいじん差し向けて下さり、そして、信心する機会も与えて下さり、おかげ頂けるような器の作り方、真が足りなかったら、真を供える機会も与えて下さり、参る場所も用意して下さり、典楽でも、参列でも、参拜でも、機会を与えて下さって。そうして与えて下さるこのご慈愛じあい。お

かげを授けてやりたいから、器の作り方も、真の供え方も、手取り足取り教えて下さる。これがあるがたいんですよ。そういうわが身であるということ、本当にねえ、腹の底から分からして頂かんといかなあ。でない、いつまで経っても、真の信心には近づけんし、お祭りだって、お祭りにならんのでしようねえ。

まあ、今日は、典てん樂がくも祭まつり員いんもない中ではありましたけれど、だから私、とても、先ほども言いました、樂らくでしたよ。ありがたかったです。とてもね。何か、神様と私と、まあそれを、みんなそれぞれで遥よ拝うされたら、それで結構なんです。それでみんなもおかげ頂きます。これも参ら

してあげてるんです、神様。皆さん、参ってると思ったら大間違いで、参らしてあげてるんです、神様。よう分からんとあきません、そこはね。
もったい
勿体ないなあと思います、本当に。

これから、典楽やら祭員が、どないなるやら、そら分かりません。神様とご相談です。でも、機会を与えてあげようと神様が思ってたから、また、そういう機会があるでしょうねえ。なければまあ、それはそれでいいでしょう。でも、私はどんな時にでも皆さんのことを、神様に礼を申し上げ、お断りを申し上げ、お願い申し上げて、お祭りを仕えさせて頂きます。

でも、神様が許し下さって、うじこ氏子のためになるのであれば、また参ら

して下さるでしょうし、典樂も許して下さるでしょうし、参列もさして下さるでしょう。そりゃ、さして下さるのは、あなたたちのためです。

今日のお祭り、麗うつくしかったですよ。樂がくはなくなっても、聞きこえるし。祭員がいなくなっても、麗うつくしくお仕えできました。でもこれが、本当なんです。「えー、自分たち、いなくなっただっていいんか」って、そりゃあね、傲慢じゆうまんですよ。何か自分ができてるなんて思うてるのは。身の丈を知らないだけのことなんです。そういう傲慢な人間にならんように、ただただ、神様にお恵み頂たまっている、金光大神こうみつだいじん様に引き立てて頂たまっている、そういうお互いであるということ、ほんまにようよう、腹の底から分かって頂たまかんと、こっからの信心が難しいと思いますねえ。

今日は難しい話、してますか？まあ、でも根本ですよ、これってね。分かる人には分かるやろうし、分からん人には分からんかもしれませんが、でも、死ぬまでに、どうかでこのことをよう分かって頂かんとね、人間は。でないといかなあと思います。謙虚けんこにならんとあきませんね。

まあ本当に、参らして頂く、信心するという心におかげはないんですよ。信心させて頂いているという、神様からしたら、させてやっていると。いうことなんです。機会を与えて下さっとるんです。でない人間は立ち行かんのんですよ。信心する機会を、恵んで頂いてる。参拜ごきねん、御祈念おんねん、御取次おんとりじ、御祭典おんまつり、これ、みんな与えて下さっとるんです。与えて頂いている、恵んで頂いているということ、本当によう分かってもらわん

といかなあ思いますね。

今日は今日で、ありがたくお祭りを仕えさしてもらいました。また、この後もお祭りは続きますけど、まあ、これまで何にも変わらず、参拝者が、百人でも二百人でも、二日間でも、楽人が何十人おろうとも、祭員が何十人おろうとも、一緒です。私は一人でお仕えさしてもらうのと。むしろ、より美しいんちゃいますか。より無駄むだがないんちゃいますか。衣擦きぬすれの音一つでもお供えできますよ。それが、何かしてあげてるような、偉偉そうな、傲慢な、神様に何か偉偉そうに物を言えるような、そんなお互いになってないのんか、氣きいつけんけんとあきませんねえ。神様、「そんなんいらん」と仰おほいますよ。そういう機会機会は与よえない方が、氏子

のためにもなるでしょうね。

今日のお話を聞かしてもらいながら、それぞれに、改まって、謙虚な
心で、信心させて頂く。神様のお祭りを、頂いていく。自分たちの本当
に立っている位置をよう見極めて、誤解がないように、お祭りをお仕え
させて頂きたいですね、これからもね。

まあどうぞ、これからもおかげ頂いて下さい。神様から、「結構な話や
った」って、「いい話やった」って、こんなん言つて頂くなんて、なかな
かないです。「神が言いたかったことや」…神様もいっぱいご辛抱して下
さってたんでしょうねえ。相済まんあいますことです。守りもとして申し訳なく思

う。

まあ、いつになつてね、それこそコロナが収まって、お参りをお許し下さるのか分かりません。でもまた、神様がお許し下さったら、お参りもさして頂けるでしょうし、^{がく}楽にしてもそうやし、みんな神様にお許しを頂いて、命から何からね、何もかも、恵んで頂いて、私たちは生かされとるんです。その当たり前前のことを、ほんまによう分からして頂いて、立つべきところに立って、信心させて頂きたいですな。

ちょっと厳しいような話かもしれませんが。でも、本当は厳しくはないんです。当たり前前のことを言ってるんです。難しいところに立たんといて下さい。上の方に立たず、ちゃあんと、人間として、人間は人間らしく、

立つべきところに立って、そういう自分たちでありつつも、神様の子として、かわいいと思ってたくさんのご慈愛じあいを注いで下さってる。だからと言って、偉そうになっいたらいけません。恵んで頂いてる、ただそれだけのことです。かわいいから、尊いから、恵んで下さってる。それだけのことです。それ以上でもない。謙虚に謙虚に、人間は人間らしくしましょ。

はい。今日はよくお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第四四話

令和三年二月十三日

生神金光大神月例祭感話

令和四年二月四日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五
